
雪の花

九条 洸実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花

【Nコード】

N2976N

【作者名】

九条 洸実

【あらすじ】

『冬にだけ咲く花がある。それを見た者には幸福が約束されるという。』

（ライラット・オリンハーレ）

聖剣ドナフより）

教会広場にて（前書き）

く冬の花の意の名を持つ 大切な大切な我が友人へく

教会広場にて

雪の花

* 1 *

『おかしいな』

『何が。ほら、冷めるよ?』

うららかな冬の午後。

光に満ちた穏やかな風に、銀色が混じる。

雪の丘は果てしなく、教会の十字にはつららが輝く。

『変なんだよ、あ、これはなかなかうまいな』

『当然よ。・・・何が変?』

『甘薯かなこれは? いや、それはいいんだが・・・』

『南瓜よ。・・・気になるじゃない。何?』

教会の裏の広場。

温かに香るスープの香り。

町の最果てからは山しか見えない。

『南瓜か・・・これは評判いいんじゃないか?』

『貴方のおかげよ。いや、で、何なの』

『いや、金があるかどうかとうまいものとは関係ないさ。』

『そうかしら。・・・私に話せないこと?』

『そうさ。いやそれはそうでもないんだが・・・』

『話してごらんないな。あ、コーヒーあるよ?』

教会の子供が二、三人、走り回っているのが見える。
彼らもこのスープを食べたのだろう。

『ありがとう、いまはいいよ。』

『そう。で・・・』

『うん。それがだな・・・』

『・・・』

教会広場にて（後書き）

本当は短編でもよかったです。が、敢えて連載形式で。

彼の話

『先日北の山に登ったんだ。絵の材料とか、保養とか、運動とか兼ねてな。』

『絵の材料とはなによね。・・・で？』

『絵具の材料やら筆代わりの植物だとか・・・で、東に下る獣道の先に北側が崖になっているところがあるんだが。』

『ん。神父様が近付くなと仰せの場所だね。』

『そうなのか？いや、知らない道を通りたくなつてな。』

『白い狼が住んでるそうよ。実際、狼は出るみたいだけど。』

『ありがたそうじゃないか。描いてみたいな。』

『異教の神だからね。そんなの描いたら叱られるよ？』

『はは、それもいいな。で。』

『あ、うん。で？』

『そこから北の海を望めるんだが、それがなんとも静謐で。是非描きたいんだが・・・』

『描きなよ。おぼえてるんでしょう？』

『描けないんだ。どうしても記憶と違ってしまふ。いや・・・』

『・・・？』

『記憶が違つてるのか、混ざつてるのか、それとも其処がおかしいのか・・・』

『何よ。』

『うん。笑わないでくれよ？』

『場合によるわよ。で？』

『花が咲いてた気がするんだ。』

『は？・・・花？』

『花。』
『花？』
『花。』

つららが落ちる音。

石造りにこだまする、嘆きの音。

『・・・そうかもね。』
『いや、馬鹿な。この冬も盛りに花が咲くか。』
『咲いてもいいんじゃない？』
『いや、うーん。』
『・・・確かめに行かない？』
『・・・は？』

つららの、音。

どこかで猫が、一声、鳴いた。

次日、山道にて

＊ 2 ＊

『きつい・・・』

『だから言つたろう。今から帰るか？』

『嫌よ。馬鹿馬鹿しい。』

『何がだ。』

光鋭い山の道。

静けさが、ここだけ時に忘れられたよう。

『いいじゃない。で、今どの辺り？』

『もうすぐ例の分岐おおおう・・・！』

『何よ。言葉喋つてよ。』

『・・・にゃー。』

『・・・』

『・・・足が滑つたんだ。気にするな。』

『滑つたのは足だけ？』

『・・・にゃー。』

雪もまばらになっていて、歩きやすいには歩きやすい。
けど、足はもう、限界。

自分の体力が絵描き以下だという、事実。

『あああ。ああ、いい天気。あああ。』

『悪かったな・・・』

『にやーじゃないのよ。』

『はい、もうしません。・・・お、ここだ。』

間道、木々のトンネル

「ふ．．．ん。」

道には見えない、木の隙間。
落ち葉で滑れば、すなわち死？

「．．．行くの？」

「どっちでも。」

「行くよ．．．」

「ま、すぐに平坦な道になるからな。しばらく辛抱したまえ。」
「へえへえ。」

彼が普通に出した手を、普通につかむ。
私より細そうな指が腹立たしい。

「おわ．．．」

「ゆっくりでいいさ。」

「はいはい．．．よく歩いたものよね。」

「まあな。あ、そこ気を付け」

「うあー!!」

「おお．．．」

心臓が跳ねている。
滑ったせいだけかは知らない。

道なき道。

光に満ちた木漏れ日の祝福。

『……にゃー。』

『……どうした。』

『そんな気分なのよ。』

『そうかよ。』

道の雪はとけずに残り、風になびいて舞っている。
彼の横顔を、照らして。

『あ、出口。』

『意外とすぐだろ?』

『これはこれで絵になるんじゃない?』

『そんなこと。あの光景を見てしまったからな。』

『……ふん?』

『こいよ。』

力強く、でも、優しく。

ゆっくりと、手繰り寄せられる。

繋いだ、手。

引き寄せられるのは……体だけ?

光があふれる、その先へ……

そして・・・不意に。

世界が、羽ばたいた。

祝福の世界

「わぁ．．．」

「．．．な。」

「うん．．．」

「．．．．．」

美しい景色、なんて。
そんな言葉じゃ足りない。

雪の明かりと、海の光と。
冬のましろな太陽と。

それは、光の精霊の、祝福。

「きれい．．．」

「．．．な。」

雪の粉が舞い、銀色に広がる、光。

寒さも。

疲れも。

痛みも。

愛も。

全ては溶けて、銀に輝く。

『……………』

開く、口。

小さく、強く。
大事に、呟く。

『……………ねえ。』

『……………ああ。』

『一緒に、なろう？』

『……………ふっ』

『……………何？』

『……………先を、越された。』

山を下る。

……………その時のことなんて。
頭には、残ってなんて。

ただ、白銀に。
ふわふわと。

残ってるのは、それだけ。

新しい日、エピソード

＊３＊

「・・・ねえ？」
「ん・・・？」

朝日が、昇る。
初めての、朝。

「・・・なんか、やっぱりさ。」
「・・・だよな？」
「いや、なんか、だって。」
「・・・だよな。」

「・・・咲いてたよ。」
「・・・な。」

コーヒーの香りと、朝の光と。
鳥の声と、それと・・・

朝が、始まる。

* エピローグ *

その教会の壁にかかる、一枚の絵。
美しい、冬の海。

彼の生涯をかけた作品。

一枚の、絵。
大きな、絵。

そこには・・・
花は、描かれていない。

新しい日、エピソード（後書き）

ありがとうございました。

気に入って頂けると嬉しい限りです。

あと、、、あらすじのなんたらさんの聖剣なにがし、探しても無駄です（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2976n/>

雪の花

2010年10月9日23時23分発行